

NPO 法人 日本ビオトープ協会
第18回顕彰受賞ビオトープの紹介

◇顕彰委員会委員長の講評・報告

『ビオトープフォーラム in 広島 2026』 2026 年 6 月 12 日、広島エールエール館 6 階 ROOM1 にて

最初に、今回顕彰されました 各団体の皆様にお祝い申し上げます。

本年 4 月 20 日に顕彰委員会を開催。各支部からの推薦を受けた案件は、いずれもビオトープ造成、維持管理、環境教育、ステークホルダー、地域貢献などで優れた取組みであり、高く評価できるビオトープでした。

◎ビオトープ大賞を受賞されました、兵庫県「イタトープ」は、2018 年から工場敷地の緑地と水路環境を整備し、ビオトープとして整備されています。専門家と従業員が一体となり、継続的にモニタリング、トンボ類や希少種ヤガミスゲなどの在来種の保全管理、生物観察会を行っています。

◎審査委員長賞に選定された、福島県「三和町ホタル水路ビオトープ」は、長年、ホタル水路の再生とホタルの繁殖や生息環境の保全に取り組んでいるいわき市のビオトープです。生態学習や清掃活動を通じた担い手育成、継続可能な管理手法の確立を図っています。

◎協会会長特別賞の兵庫県「モリアオさん家のビオトープ」は、絶滅危惧種モリアオガエルの保護拠点となる校内ため池を中心とした学校ビオトープです。加えて、水辺植生の回復、外来種対策などの活動を、生徒、教職員、専門家の協働によって行っています。

◎環境学習推進賞の広島県「すいこう認定こども園ビオトープ」は、ひょうたん型の池『ひょうたんビオトープ』や造成した築山『すずやまとんねる』を設け、限られた面積の園庭という制約の中で、設計施工に工夫が多く、数年後が楽しみです。

◎プロアクティブ功労賞に選定された、愛知県「Aisan みらい工場ビオトープ」は、西三河生態系ネットワークの拠点として、希少種の保全と在来生態系の復元（絶滅危惧種の保護や侵略的外来種の駆除）、体験型環境教育による社会貢献を主眼として、今後の展開が期待されています。

今回、以上 5 件を顕彰させていただきました。各団体におかれましては、ビオトープの普及啓蒙、環境教育、地域活性化につながる活動を継続していただくようお願い申し上げます。

（協会顕彰委員長 鈴木邦雄代表顧問）



◇ビオトープ大賞

【下記各顕彰書類より転記】

名 称	イタトープ
受賞者	三菱電機株式会社 伊丹製作所／電子通信システム製作所／西部地区研究所、株式会社ラーゴ
【テーマ・概要】 伊丹地区は尼崎市の市街地に位置し、周辺環境は緑地や水域が少ない。この立地の中で構内緑地を拠点に生物多様性保全と従業員の環境教育を推進している。「イタトープ」の目的は水生生物の保全と従業員の環境意識の向上である。かつて工場内の水路では多くの生物がみられたが、都市計画道路の整備により失われる事となった。そこに暮らす生物の行き場を守りたいという思いから、2018年度に代替の生息地として整備した。水路にいたトンボ類をはじめ、今では様々な在来種が生息し、市街地での貴重な生息地となっている。従業員が活動の主体となり、専門家の指導を受けつつトンボ類や希少種「ヤガミスゲ」などの在来種の保全、植生管理、生物観察会などに取り組んでいる。これにより工場内外の生態系ネットワーク強化にも努めている。	
【整備方針と管理手法】 イタトープ内に湿地や池など異なる水域を設け、それぞれの環境を好む水生生物の生息に配慮した。また、トンボ等が生息しやすいように水生植物を植栽した。植栽にあたり、地域の水辺植生の再現と、植物の遺伝的多様性への配慮のために、近隣河川から地域産の在来植物を移植した。管理については、外来種の選択的除草や草刈りなどの植生管理を従業員主体で実施し、希少種ヤガミスゲを含む在来種の保全に取り組んでいる。専門家との生物モニタリングを毎年実施し、その結果をフィードバックして翌年の維持管理計画を策定している。また、一般従業員を対象とした観察会を実施して環境教育に活用している。	



◇審査委員長賞

名 称	三和町ホタル水路ビオトープ
受賞者	いわき市三和町商工会青年部、いわき市三和町下市萱区、プランリーフ
【テーマ・概要】 ～地域の活性化と未来へ繋ぐ取り組み～ いわき市三和町下市萱地区では、平成10年に中山間地域総合整備事業の一環として生態系保全水路が整備されましたが、東日本大震災・原発事故の影響により長らくホタル水路は放置されていました。平成30年に地域代表の方が中心となり、NPO 法人日本ビオトープ協会様よりご指導いただきホタル水路の再生とホタルの繁殖や生息環境の保全に取り組むこととなりました。その後、その意思を受け継ぎ三和町商工会青年部が、地域の自然資源を未来へつなぐことを目的に、ホタル水路の維持管理とホタルの繁殖活動を行う事となり、令和5年には地域活性化の一環として、イベント「ほたるのさんぽみち in みわ」を開催するようになりました。 さらに、中学生によるごみ拾い活動や小中学校児童を対象に、水路を活用した自然環境学習を行い、自然を学び守る意識の醸成に努めています。	
【整備方針と管理手法】 三和町ホタル水路ビオトープを、継続的に守り続ける体制の構築を基本方針としています。これまで地域代表の方を中心に維持されてきた取り組みを、商工会青年部が担い手として受け継ぎ、地域住民と協力しながらホタル水路の維持管理を行っています。 除草作業や水路のしゅんせつ等の維持管理は商工会青年部と地域住民が、ホタルのエサとなるカワニナ・タニシ等の繁殖活動を学校が担いそれぞれが出来る役割で活動を実施しています。さらに今後は、小中学校児童と連携を強化し、地域・商工会青年部・児童が協同してホタル水路の保全に取り組む体制を目指しています。 生態学習や清掃活動を通じて次世代の担い手を育成し、日本ビオトープ協会様の専門的知見・助言等を取り入れながら、継続可能な管理手法の確立を図っていきます。	



◇協会会長特別賞

名 称	モリアオさん家のビオトープ
受賞者	西宮市立山口中学校モリアオガエル保存会
【テーマ・概要】 本校ビオトープは、校区内にあるため池のサテライトとして、また、生き物が通う緑の回廊（コリドー）をめざして設置された。さらに、半世紀以上続く、絶滅危惧種であるモリアオガエルの保護活動を、自然環境下で実践する地域生態系の研究の場として、最大限に活用されている。産卵環境の再生、水辺植生の回復、外来種対策を科学的調査に基づき段階的に実施し、生物多様性の向上を確認してきた。活動は総合的な学習の時間や理科と連動し、全校的な環境教育として体系化。生徒・教職員・地域住民・専門家が協働する持続可能な管理体制を確立し、都市近郊型学校ビオトープのモデルとして普及啓発を行っている。	

【整備方針と管理手法】

「在来生態系の復元」と「教育的価値の最大化」を整備方針として進めている。地域のため池周辺の保全・補植活動をきっかけに、産卵に適した枝張り確保し、水位・水質・卵塊数を継続的に記録して科学的検証を行っている。また、外来種は計画的に除去し、在来種優位の環境を形成。落葉や抽水植物は生息環境として活用し、過度な管理を避ける順応的維持管理を実践している。年間活動計画・継承マニュアルを整備し、SNSや発表会で成果を公開することで、継続性・社会性・地域環境改善効果を兼ね備えた学校ビオトープ運営が「モリアオガエル保存会」を中心に展開されている。



◇環境学習推進賞

名 称	すいこう認定こども園ビオトープ（ひょうたんビオトープ+すずやまとんねる）
受賞者	学校法人翠光学園すいこう認定こども園、株式会社カジオカ L.A

【テーマ・概要】

～ 遊びの中に学びがいっぱい ～

すいこう認定こども園は、子どもたちの遊びを大切にする幼保連携型認定こども園です。

園庭にはひょうたん型の池『ひょうたんビオトープ』や、2025 年に開園 50 周年記念事業として造成した築山『すずやまとんねる』があり、四季折々の表情を見せる起伏のある園庭でワクワクする遊びを通して子供たちの五感を刺激し、豊かな感性を育てています。また、メダカや水辺の生き物、トンボの羽化の観察などを通じて生き物に対する優しい心の育成や、『なぜ?』『どうして?』など、生き物の不思議を発見する「学びの場」となっています。

【整備方針と管理手法】

子どもたちに自然や生き物と触れ合うような豊かな体験をさせたいという思いから、2019 年にビオトープ池を設置し、メダカや水辺の生き物の観察を楽しんでいます。自然と触れ合いながらその神秘や面白さに心を躍らせる感性を育む環境を作るために、築山『すずやまとんねる』を増設。四季折々に咲く花や木の実を遊びに取り入れるなど、創造的な遊びで豊かな感性を育てています。

管理は子供にとって安全で、生き物が棲みやすいように、園で撫育管理を行っています。



◇プロアクティブ功労賞

名 称	Aisan みらい工場ビオトープ
受賞者	愛三工業株式会社、愛協産業株式会社

【テーマ・概要】

テーマ「西三河地域を中心とする自然環境の再現」

自動車を中心としたエンジン関連部品の製造・販売を主力事業としている当社は、「自然と共生する工場」づくりに取り組み、地域の自然再生・生態系保全を目的としたビオトープを2025年に竣工しました。ビオトープの概要は下記3点になります。

①希少種の保全と在来生態系の復元：絶滅危惧種の保護や侵略的外来種の駆除を徹底し、工場建設前の地域本来の自然環境を再現・維持

②西三河生態系ネットワークの拠点化：本ビオトープを地域における生物供給源と位置づけ、周辺の自然環境と連動した「生態系ネットワーク」の中核を担う

③体験型環境教育による社会貢献：米作り等の環境学習を通じて、従業員や地域社会の生物多様性への理解を深め、自然再興に向けた意識を醸成



【整備方針と管理手法】

整備方針「10 年後の姿を見据えた地域在来種中心のビオトープ」

概要	管理手法	
①希少種の保全と在来生態系の復元	希少種の保全	絶滅危惧種の定期調査を実施し、保全場所の改善につなげる
	地域在来種の植栽	あいちミティゲーション推奨の地域在来種育成
	侵略的外来種の駆除	有識者指導のもと侵略的外来種の抜根作業
②西三河生態系ネットワークの拠点化	生物調査	植物・昆虫・野鳥のモニタリング調査実施。周辺環境の生態系と調和のとれた整備
③体験型環境教育による社会貢献	環境教育の実施	従業員向け稲作の環境学習。将来地域一般開放を目指した維持管理計画

その9. 東京都港区立有栖川宮記念公園

農学博士、元東京農業大学
日本ビオトープ協会顧問

立川 周二



港区は東京湾の海岸線に面しています。武蔵野台地が浸食されて谷地を生じ、高低差のある複雑な地形を残しています。都内でも最も坂の多い区として知られています。

ここにご紹介します公園は、東京メトロ日比谷線の広尾駅より、徒歩数分で公園入口(広尾口)に至ります。この入口は最も低い位置にあり、園内を奥に向かうと殆どが上り坂となります。湧水や雨水は、全て入口近くの大池に貯められています。林内を歩くと、道沿いのせせらぎが音を立て、都心に居ることを忘れさせます。高低の層をなす樹木と地表を覆うシダやササ類の草本類、野鳥の鳴き声と羽ばたきの音に、深山の雰囲気包まれます。筆者は1992年より、都内の公園をめぐり、特に水面で生活するアメンボ類の調査を続けてきました。100ヶ所を超える地点を調べ、都内の低地には10種のアメンボが生息することを確認しました。この公園では僅かにアメンボとヒメアメンボの2種を認めましたが、この環境ならば数種は生息するはずです。生きものの生息には、ビオトープとしての環境条件が重要です。現代では環境が変わると、生息場所の包容力が縮小されて、棲みづらくなる傾向があります。都市化がその実例で、種類の減少は皆さんも実感している事です。私は大きな潜在能力をもったビオトープを、もっともっと増やすべきであると考えています。この公園からはそのようなパワーが感じられ、今こそ無くてはならない存在です。



図1. この有栖川宮(ありすがわのみや)記念公園には、東京メトロ日比谷線の広尾駅から徒歩5分ほどで、広尾口と呼ばれる入口に至ります。



図2. 公園の一角にある有栖川宮殿下の銅像。江戸時代のこの地は武家屋敷として受け継がれ、南部藩の下屋敷を経て、明治・大正には有栖川宮のお屋敷となりました。その後、昭和の初期に当主になられた高松宮から東京市に公園にするよう下賜されたそうです。



図3. 公園管理事務所。事務の方々は園内の環境整備と管理、市民のためのイベントの計画と実施、訪問者や公園ボランティアの対応など、多忙に毎日過ごされています。



図4. 広尾口には大池が水を湛えています。公園の面積は約6.7ha、斜面地にケヤキなどの大木、中高木にサクラやカエデ、低木にツバキやアジサイ、林下はシダやササ類の草本植物に覆われています。



図5. 園内の斜面を結ぶ歩道には敷石が並べられ、上り下りが安全かつ快適にできるようになっています。この緑豊かな回遊式庭園は当時の東京市公園課が担当し、設計から建設まで委任された井下清課長の尽力により完成しました。



図6. 道に沿って溪流が流れ、せせらぎの音が心地よく、水辺の植生が見られます。人が行き交える道幅があり、また草花を間近に観察もできます。



図7. 大池で繁殖しているカルガモが歩道に出て来ることもあり、ヒトに驚くこともなく、身近に野生を感じることができます。



図8. 学校や幼稚園などの児童が先生に引率されて、あるいは子供連れの家族をよく見かけます。高松宮殿下のご要望であった、子供が自由に過ごせる公園は実現されています。



図9. この公園の水辺環境は、地域生物多様性の増進に役立っていることが評価され、2025年に環境省より「自然共生サイト」として認定されました。今後も生きものの仲間が増えることが期待されます。

編集後記

今回の特集では、「山、川、海と人がつなぐ ネイチャーポジティブ時代の環境保全のあり方」をテーマに、自然環境の保全・再生と、そこに携わる人々の活動について考えました。

今回ご紹介した広島大学東広島キャンパスの取り組みは、その具体的な実践例の一つです。ビオトープは、単に生きもののための場所ではなく、人が自然を知り、生きものの命を感じ、自然とのつながりを取り戻す場でもあることが伝わってきます。

山・川・海は互いにつながり、その循環が私たちの暮らしを支えています。だからこそ、ネイチャーポジティブは地球規模の目標であると同時に、私たちの身近な地域から始めることのできる取り組みでもあります。

一つひとつは小さな活動であっても、その積み重ねが地域の自然を豊かにし、やがて次の世代へとつながっていくのではないのでしょうか。

「守る」から「再生する」へ。

「つくる」から「育てる」へ。

今回の特集が、皆さまにとって身近な自然を見つめ直し、自然とのつながりを考え、新たな一歩を踏み出すきっかけとなりましたら幸いです。

最後になりましたが、ご多用の中、ご執筆いただきました皆さまに、心より感謝申し上げます。

編集委員:情報委員 若月学・砂押一成、正副会長、総務委員、本部事務局

自然との共生をめざして一緒に活動しませんか。◇会員募集中◇

会員の種類 ・法人正会員 この法人の目的に賛同して入会し、活動を推進する法人

・個人正会員 この法人の目的に賛同して入会し、活動を推進する個人

年会費 ・法人正会員 100,000円

・個人正会員 10,000円

※10月以降3月末までのご入会は規程により、年会費は半期分となります。

会員の特典 ・年2回発行の機関紙「ビオトープ」の入手。

・会員メーリングリストによりE-Mailによるシンポジウム、研修会等情報の入手。

・その他、地区活動への参加など。

入会手続き、入会申込用紙については、WEBページ <https://www.biotope.gr.jp/application/apply/>

または下記本部事務局までメールかFAXでお問い合わせ下さい。

日本ビオトープ協会誌「ビオトープ」No. 58

2026年(令和8年)8月31日発行

発行所 特定非営利活動法人 日本ビオトープ協会

発行責任者 久郷 慎治 (日本ビオトープ協会 会長)

編集 協会 情報委員会・正副会長・総務委員会・本部事務局

本部事務局 〒170-0005

東京都豊島区南大塚2-6-7-101

TEL 03-6304-1650 FAX 03-6304-1651

E-Mail honbu@biotope.gr.jp

URL <https://www.biotope.gr.jp/>

会員、ビオトープアドバイザーからの投稿歓迎

ビオトープの研究、実践事例等、会員・ビオトープアドバイザーの投稿を募集しています。投稿頂く場合は本部事務局までご一報下さい。



《出版物のご紹介》

主席ビオトープアドバイザーで、江戸川大学社会学部現代社会学科准教授の佐藤 秀樹氏が、書籍を発表されました。環境教育の入門的な内容となっており、下記HPから購入できます。

<https://miraipub.jp/books/35468/>

『先生、なんで環境のこと考えないといけないの? ~「モヤモヤ」から始まる環境授業~』

著者 佐藤 秀樹・いものや悠

みらいパブリッシング

四六判 192ページ ソフトカバー

価格 1760円(税込)

2026年1月27日 ISBN978-4-434-37251-3



「ヒメギフチョウ」
写真 内海千樫氏 撮影